【翻訳】２：特集「ローマ海軍」より

Securing Seas and Shores:Fleets of the Roman Empire,

In： *ANCIENT WARFARE*, Vol.5-5, 2011.

ローマ海軍に関する研究はほとんどなされていないに等しいので、雑誌記事を紹介することの意味もあると考えた。これでも特集全体の半分の分量にすぎず、図版は基本的に削除していることをお断りしておく。

歴史学的序論

三井優一　訳

海と沿岸の保全

ローマ海軍は、その功績にも関わらず、陸軍の威光により永遠に覆い隠されてしまうのだろうか？ ローマ帝国による軍団攻勢の数々は、栄光に彩られた軍事優越の遺産を創り出したが、海軍はそれにもかかわらず、ローマ帝国の成立、維持、そして全面的な保全において重要な役割を演じた。現代の歴史学者であるJ.H. ローズは、彼の著書である「古代の地中海（*The Mediterranean in Ancient Times*）」において、ローマ海軍の必要性について最も良い説明をしている。「・・・ローマ文明の普及において・・・奇跡をもたらすローマ艦隊の影響は、全くと言ってよいほど無視されてきた。しかしながら、ローマ帝国は・・・その艦隊に依存していたことは明白である」。

コートニー・フォスター著

ローマのポエニ戦 以前の海上戦経験は、通常ならば、最屑目に見ても未成熟と見做されている。古代の歴史家アンミアヌス[1] の記述や同時代のコインに描かれていることから、ローマは紀元前394年には軍船を使用していた。しかし、その艦隊は、厳しい圧力下で構築されたという歴史を持つ。さらに、海事二人委員会[2] の下で、短期間の試行があった以外では、紀元前67年まで取り立てて述べるような常設海軍は存在しない。その時期には小規模の戦隊が常設として就役・維持されていた。(時期については議論がある)

海上戦へのこのあまり気乗りしないアプローチにもかかわらず、また海上におけるいくつかの大敗にもかかわらず、ローマは、紀元前3世紀中期には主導的な海軍力を保持していたカルタゴに対して最終的に勝利を得た。この結果は、賢明な戦略の連携によるものであり、ひとつは、シキリア島でカルタゴの主要基地を着実に奪取していくという方法であり、ふたつめは、ポリビュオス[3] が伝える有名な話のように、捕獲したカルタゴの五段櫂船を利用して、カルタゴの海軍の方式を器用に移し替え、最終的には技術革新をする方法であった。コルウス（一種の乗込用桟橋）の導入は、古代海戦で要求される運動戦術の代わりとして、ローマがその海兵を際立たせることができた。

結局、このようなイベントは共和政の崩壊から帝政の創生への道を拓いた。秀でた海軍なしで、ローマは拡張した権力を支えることはできなかっただろう。

---

[1] アンミアヌス(Ammianus Marcellinus: 330? - 395BC)：ローマの歴史家。著書『歴史（*Res Gestae*）』の原本は31巻で96 - 378AC の期間を記述していたが、現存するのは14 - 31巻の18巻分（353 - 378AC）である。

[2] 海事二人委員(*duoviri navales*)：軍船の調達・修理などを実施する職。艦隊における軍船の調達・修理担当二人委員(*duumviri navales classis ornandae reficiendaeque causa*) とも記述される。

[3] ポリュビオス(Polybius)：Πολύβιος (203 - 120BC) 古代ギリシアの歴史家。著作『歴史(Ἱστορίαι)』の中でポエニ戦争について詳細に記録している。

共和政の凋落と内乱の終結で、ローマはオクタウィアヌスの下で帝政へと体制を変えた。後に彼は、紀元前27年に皇帝アウグストゥスと称されるようになる。紀元前31年には、アントニウスとクレオパトラに対するアクティウムの海戦における勝利が、多数の手による権力支配から彼ひとりのものへの移行を可能とした。元老院が彼に授与しようとした権力にも関わらず、オクタウィアヌスは「元首（*Princeps*）」つまり多くの市民の中の「第一位の市民」という名誉称号のみを受領しただけだった。アウグストゥスは、自らが新しく作り上げた権力により、 海軍の維持と急を要する本格的な改革の決定について、絶対的な委任を受けた。アウグストゥスは軍の改革に注目していたのではなく、むしろ彼自身の経験のなさだったであろう。特にアントニウスを打ち負かすために演ずる役割を考えていた。決定的な要素は海軍の用法にあった。こうして、彼はローマの艦隊を再編成する一連の改革を開始した。結果として、完全に統合されたシステムとなった。少なくとも歴史家タキトゥス[4] は次のように描写している。「国の領域は、北海や遥か遠い河川にまで拡大された。軍団と属州と艦隊は、すべて緊密に統合される」：『年代記』[5] 1.9（国原吉之助訳）

アクティウムの海戦の結果により、オクタウィアヌスは様々なタイプの数百隻の船を手元に残すこととなった、ローマ海軍は、その貧弱な始まりと比較して、規模において級数的に成長していた。オクタウィアヌスが陸海ともに巨大な戦力を手元に置く必要性があったにしても、その戦力は、彼の新帝国の案内役として望んだ市民平和の期間には、むしろ過剰で費用もかさむものであった。それゆえ、海軍については、過剰船舶は破棄・焼却するか、あるいは一時的に、フォルム・ユリイ[6] にあった短命の艦隊に再配備した。

艦隊配置

海軍について、アウグストゥスは、彼の部隊を三つの常設主要艦隊に再配置した。ひとつ目の艦隊はイタリア北東岸にあるラヴェンナに、もう一つはナポリ湾の北側の先端にあるミセヌムに、そして三番目はフォルム・ユリイに、割り当てられた。アウグストゥスは、間違いなく、当初は、別の内戦が勃発した場合に、それらの支援として利用するために、これらの艦隊を維持しようと思っていた。しかし、それらは内戦対応だけでなく、次第に他の任務を負うこととなった。ミセヌム艦隊は、その重要性がラヴェンナ艦隊によってその重要性が上回ることとなった5世紀に至るまで、帝国海軍の主要戦力となった。フォルム・ユリイを基地とした艦隊は、明らかに急速に廃れて解散し、解体された。両イタリア艦隊の人員は、それぞれ約10,000人と見積もられている。6世紀の著述家ヨルダネス[7] によって与えられた、彼の見解による設定の数値を信じるならば約4万の要員がいたと思われる。

イタリア艦隊（フラウィウス朝以後は近衛艦隊）とは別に、帝国中にいくつかの艦隊が配置されていた。これらは歩兵・騎兵支援部隊と同じレベルにあるように思える。それらと同様に、属州総督の指揮下にあった。それらの作戦地域は、しばしば同じように制限されていると思われる。ライン川の艦隊、例えばゲルマニア艦隊は、現ボンの南側からデルタ地帯へ下るように、ライン川を航行していたが、高地ゲルマニアまでは行っていなかった。その属州は、艦隊の利益なしに偉大な川の流域を防護する必要があった。いくつかのケースにおいて、地方

---

[4] タキトゥス(Tacitus)： Publius(Gaius) Cornelius Tacitus（55? - 120? AC)、帝政ローマ期の歴史家、元老院議員。著作として『ゲルマニア（*Germania*)』『アグリコラ（*Agricola*)』『年代記（*Annals*)』『同時代史（*Histriae*)』などがある。

[5] 『年代記(*Annals*) 』: Cornelius Tacitus の著作。ティベリウス帝即位（14AC）からネロ帝の自殺（68AC）までを記述した全18巻の歴史書であるが、全体の約三分の一が散逸している。

[6] フォルム・ユリイ(Forum Iulii)： 現南フランスのフレジュス（Fréjus）にあったローマ海軍の基地。当時は奥まった湾になっており艦隊の基地として有効であった。第4代皇帝クラウディウス（在位 41 - 54AC）の時期までは存在していたと考えられている。

[7] ヨルダネス(Jordanes)： 6世紀の官僚、歴史家。著書『*Romana*』でローマの歴史、『*Getica*』でゴート族の歴史を記述している。

の陸軍部隊は、自身に限定的な海軍能力を与えるために、自前の船と造船所を建設した。これはおそらく、伝統的な兵役の区分が、我々が考えるほどには、ローマ人にはあまり厳格ではなかったことを示している。この考え方は、海軍人員の陸軍部隊への、明らかな定期的な異動によって補強される。

船舶の建造と分類

古代の建築家ウィトルウィウス[8] の記述によると、造船所は彼らの軍船建造のために「カラベル」方式を使用していた。基本的には、この方法で、船体の建造を始めた。支柱は竜骨に装着された。北ヨーロッパの「重ね張り」船の横板とは異なり、棚板は上から下まで互いに重なり合ってはいない。代わりに、各棚板は端と端で隣り合う板を接合し、ほぞ穴とほぞで固定された。異なった木材が軍船の異なる部分を建造するために使用された。ブナやナラのような広葉樹材が竜骨と骨組に利用されており、一方針葉樹の木材は棚板張りに使用されていた。

軍船の異なる型式は、各々の船舶に設置されている「区画」に置かれる漕手の数によって、古典的に識別可能であった。そのような区画は、船の片舷側に垂直に交互に置かれた、櫂と漕手とから成っていた。例えば、二段櫂船は、両舷に垂直あるいは少しずれたところに二人の漕手を持ち、それぞれ一人の漕手が一本のオールを漕ぐ。その長さと角度は、列間の位置にかかわりなく、水面を同時に捕えるために、正確に測定されたものであった。基本的には、その時代の典型的な軍船は上記のようになっており、二段櫂船、三段櫂船、四段櫂船、五段櫂船 などに限定されたものではなかった。

各船に装備されている櫂の層の最大数は、長年議論をされ続けているが、現在一般的には、軍船は三段を超えない層を備えていたと考えられている。このような四段櫂船や五段櫂船などの大型船は、それぞれの櫂に割り当てられた複数の漕手を持っていた。櫂ごとにひとりの漕手ではなく、櫂ごとに複数の漕手がいて、船舶の大きさによって決定されていたと思われる。したがって、漕手の数は、船の分類のための決定的要因だった。

古代ローマ帝国初期の時の軍船の最も一般的に使用される型式は、三段櫂船とリブルナ型[9] となった。後者は後期ヘレニズム艦隊とイリュリア[10] 海賊の両者の船舶を模範としていた。これらの船は小型で軽快であり、そのため機動性があった。考古学的には、軍船はほとんど残存していない。それらは軽量に建造されているため、沈没しない。戦闘中に破孔を生じても、水線で水浸しになるだけであり、戦いに勝利したときには、修理されるか分解されるかである。明らかに、水際に残されたものは、明らかに朽ち果てたであろう。ガレー船の小さなサンプルは、ピサ、シキリア島および辺境地帯に沿って実際に回収されている。もちろんそれは、識別と分類について激しい議論となっている。一方、そのサンプルは、ローマ人が他の文明から、いかに学んだか、そして彼らの船舶をいかに地域の環境に適応させたかを示している。

陸に上がった海軍

ローマの帝国艦隊の任務は、必ずしも直接の戦争に限定される必要はなく、また帝国の海や川にさえ限定される必要はなかった。海軍は、陸上に前もって設定された一連の義務を負っていた。ある事例において、海軍はローマの悪名高い見世物に関連した役割を果たしていた。例えば、アクティウムの海戦の二年後、三重の凱旋式を下回らない祝賀のひとつとして、アウグストゥスはヤニクルムの丘[11] の近くに建設命じた人工的な池を持っていた。そして彼は、この池を実際にティベリス川から引いて来た水で満たし、アウグストゥスがアクティウムで展

---

[8] ウィトルウィウス(Vitruvius)： Marcus Vitruvius Pollio (1cBC)、共和政期の建築家。著書『建築について(*De Architectura*)』が伝えられている。

[9] リブルナ型(*liburna*)： 二段櫂船の一種

[10] イリュリア(Illyria)： 現バルカン半島西部にあったイリュリア人の国、168BC に共和政ローマによって征服された。後に属州イリュリアとなり、10AC に属州パンノニアと属州ダルマキアに分割された。

[11] ヤニクルムの丘(Ianiculum)： 古代ローマ市の外側、ティベリス川の西側にあった丘、ローマ七丘には含まれない。

開した事実を実際の大きさで再現することで、その成功を祝うことを考慮したものだった。30以上の実物大の船舶、軍船および軽量船などの間での模擬海戦（*naumachia*）は、ローマの全ての者が注目するなかで行われた。また、アントニウスに対するアウグストゥスの勝利を、ローマの市民に知らせしめる方法として、公然と提供された。それはおそらくは、そのような見世物を演出するのに必要な船舶と装備を提供するのは、海軍の責任だった。また、この特別な見世物を再現するために、設定される池の準備を行うのは、海軍の責任だった。このイベントは、ローマ皇帝により命ぜられた最初の海軍の見世物として記憶に残された。海軍は、アウグストゥスの治世を通して同様な行事に、積極的に参加し続けることとなる。

コロッセウムは、紀元80年に完成したときには、数万人の観客を収容するように設計され、運用された。かつて円形闘技場の前での暴動シーンを描いた、ポンペイで掲示されていた絵は、コロッセウムやその他のあまり知られていない円形闘技場の両方で使用されるいくつかの技術の進歩を明らかにしている。特に、この絵は日除けとされた「帆」の使用法を示しており、それは太陽から聴衆を覆うため、滑車システムによって調整することができた。海軍にとっては、そんな大規模な日除けを巻き上げ・畳む責任に応じるのは当然の選択であった。特に、自分たちは、帆の操作や展開に慣れていると考えていたからである。さらに、ミセヌムとラヴェンナの艦隊の両方から特別な海軍の乗組員は、近衛隊とは別に、恒常的に、ローマにおいて自前の兵舎で駐留していた。彼らの任務の全ては、必ずしも明らかではないが、ある種の配達サービス（この任務に就いた水兵の不満に対する気難し屋のウェスパシアヌスの反応の話の中に暗示されている）を含んでいたことは確かである。そして、イタリアの田舎における泥棒の逮捕に要員を提供するような臨時の任務も含まれていた。

海賊と哨戒

海賊に対するローマの沿岸防御を目的のための海軍の用法を立証するすべての証拠は文献であり、しばしば曖昧さがあり、それゆえ幾分かは疑いのあるものである。海賊不法行為は、内部闘争と外部紛争の両方の時代に広範囲に頻発し、平和の時代には封じ込まれていた。これは常に海軍の介入を必要されているのではなく、むしろ政治、経済および沿岸脆弱性との関連で理解することができるであろう。元首政によるローマの平和とストラボン[12] の賞賛にもかかわらず、海賊行為は完全に地中海から根絶されなかった。共和政期における最も有名な、大ポンペイウスの指揮による対海賊作戦行動でさえ、海賊行為を完全に排除できなかったし、また支援者や作家たちが描いたような輝かしい成功ではなかった。これにもかかわらず、としてフィリップ・デ・ソーザは説明する。「ローマの軍当局は、海賊行為を最小限に抑えるために多くの労力を費やし、そのことは、帝国の住民、特に貿易関係者たちに対して、多くの利益のあることだった」。

ローマ帝国の成功は、部分的には、ローマが入手した軍事資源によるものである。この広範囲にわたる成功は、帝国の政治組織に起因することができる。それは属州から税を引き出すことによって、皇帝が陸軍と海軍の両者の資金を調達することを可能としていた。デ・ソーザは次のように説明している。初期のローマ帝国と「以前の国家の間に在った、どんな国家もそのような巨大な軍を維持したことはなく、陸軍も海軍も、必ずしも使用されるとは限らずに、多くの場合、地中海と隣接地域で海賊行為を抑制するものであった」 。それにも関わらず、海賊の根拠地の撲滅について、法制上のローマ当局のよく知られた主張は、政治目的に利用され、しばしば、ローマの人々に気に入られるように、部分的に美化された。それは帝国としての覇権を正当化した。翻ってそのことは、彼ら自身を典型的な「その他の者」（海賊、盗賊、あるいは、いわゆる蛮人という名称で広く知られている）から、遠ざけることができた。

---

[12] ストラボン(Strabo)： Strabō　Σ τ ρ ά β ω ν （63BC? - 21AC）： 古代ローマ時代の地理学者・歴史家。著書『地理誌（Γ ε ω γ ρ α φ ι κ ά)』17巻で多くが現存している。

結論

ローマ帝国艦隊は、陸軍、皇帝、そして帝国の住民の改善に不可欠な役割を果たした。ローマの海軍が、陸軍と同レベルの評判を享受しないなら、極めて不幸なことである。陸軍とともに、ローマ帝国海軍は、古代と現代両者の他のほとんどの文明からの追随を許さないような方法で、帝国が何世紀にもわたって事実上そのまま維持することを可能とした。

更なる読書のために

Ch. Starr, *The Roman Imperial Navy* (3rd ed., Chicago 1993).

M. Redde, *Mare Nostrum* (Rome 1986).

D. Kienast, *Untersuchungen zu den Kriegsflotten der romischen Kaiserzeit* (Bonn 1966).

Ph.de Souza, *Piracy in the Graeco-Roman world* (1999).

M. Pitassi, *The navies of Rome* (Woodbridge 2009).

クラウディウス・テレンティアヌスのパピルスの手紙　【省略】

リブルナ型アウラタの士官　**モンタヌスの墓石**

艦隊乗組員たちを描写した最も興味深い石碑の一つは、2005年、イタリアのラヴェンナで発見された。ラヴェンナ艦隊の港であったクラッセ地区の発掘中のことである。それは完全な軍装の若いローマ士官の墓石であった。彼の右手には、おそらく投槍、左手には軍用マント（*paludamentum*）を持っている。下級士官は、力強い胴鎧を着用し、肩には翼状の肩当（*pteryges*）を装備し、胴鎧は体に沿って腰部まである。また刀剣（*gladius*）が見え、彼の脚には軍靴（*caligae*）がある。不完全な碑文は、兵士の名前がモンタヌス（？）と伝える。彼は元々、リブルナ型のアウラタ（黄金）号で軍役に就いている副官であるカピトという名前と関連している。記念碑は、死者の後継者、おそらく彼の同僚のひとりによって委託された。

ラファエル・ディ・アマト博士著

墓石（*cippus*）の発見は、ラヴェンナ考古学グループの専門家たちの支援をうけて、エミリア・ロマーニャとラヴェンナ古代考古学財団の監督で実行された、2005年の活動中になされた。発見された石板にある考古学的文脈によれば、紀元後5世紀のものである。考古学者エンリコ・チレッリによる説明によれば、墓石（*cippus*）は、国の新しい主都ラヴェンナの港に海軍基地を改装した結果として、紀元後5世紀の初頭に拡張された幾つかの港湾施設の支柱として再利用されていた。墓石（*cippus*）は、保管所周辺にある艦隊地区で発掘され、1-3世紀時代の共同墓地に、間違いなく属していた。これが墓石（*cippus*）が壊れている理由であり、結果として、碑文の上部が保存されなかった。発掘により、ポデーレ・ミンゲッティにあるこの共同墓地の一区画を調査した。その内部には、初期帝国時代の大掛かりな地下水路が走っている。水路は完全に冠水しており、水面下3メートルを超えるところに位置していた。そのため調査は、考古学者たちの協議の結果、潜水艇を要求することとした。その構造は、検査や保守のため、小さな井戸を適宜備えており、そこで墓石が発見された。アーチ天井の部分崩落を補強するため、後期ローマ時代に再利用されたときに、墓石はその場所に置かれた。

墓　　石

The stela of Montanus

石碑（*stela*）は、所有者の遺骨を受けるために設計されており、上部は中空で、1メートルを超えるような大きな大理石の板である。彫刻面は、私たちに問題となっている男の重要かつ多様な情報を与える。碑文および、不運にも完全ではないが、兵士の肖像の他に、戦士の名前の一部（氏族名）であるモンタヌスを記述している。

当初の解釈によれば、名前カピトは（墓石には主格で書かれていた）モンタヌスと呼ばれ、また彼の階級である、下級将校または副官（*optio*）にも言及しており、彼は軍団にあって主に管理業務を持って、アウラタ（黄金）号と呼ばれたリブルナ型に勤務していた。これが、この主題における私の以前の諸論文で承認している、この主題の可能な解釈の一つである。

碑文のより注意深い解読は、私たちに異なった解釈を与えることができる。
碑文は、4行から構成されており、1行目は重大な損傷がある。2行目は部分的に不完全であり、3行目と4行目は、わずかに破損している。

カピトは、3行目に書かれている。それは彼がリブルナ型アウラタ号の副官（*optio*）であることは明らかである。4行目の *COGN（...）VS*（当初は *Cogneus* - *Cocneus* と読まれた）は、おそらく「故人の *COGN[AT]VS ET HERES*」（「親戚と後継者」、主格で書かれている）として解釈するのがより説得力がある。この男は、3行目に示されている男、すなわち、*CAPITO OPT（IO） DE LIBURNA AURATA*（カピト、アウラタ号と呼ばれるリブルナ型の副官）とするべきである。このような場合とすれば、モンタヌスは、副官（*opitio*）であるカピトが墓石を奉納した故人ということとなる。故人は、氏族名（*cognomen*）とともに、2行目にのみ示されているように見える。最もよく知られている碑文では、亡くなった海軍軍人は通常、3つの名（*tria nomina*）で示すか、あるいは氏族名（*cognomen*）のみで指定されるならば、それは父の名前に由来している（たとえば、*ILS* 2825, *ILS* 2827）。

提案された理論が正しければ、可能性として、失われた名前（個人名 *praenomen* と家族名 *nomen*）を持つ完全な名前は、消失した1行目にあった。それには4つの文字、*F DE[I---]* が残されている。おそらくは神に対する献辞であろうか？ これに、故人の階級と氏名の最初の部分が続いていた可能性がある。

氏族名（*cognomen*）*MONTANVS* は、碑文の断片 *[-----] AN IIX* から導き出されている。最後の3文字は、数字に言及しているように見える。この数字はほぼ間違いなく軍役の年数、8 を示している。通常、軍役の年数は、生涯の記載言及と繋がっている。それは、艦隊の兵士のいくつかの石碑おいて、非常に短くなっている（V = *vixit*, M= *militavit*）。2行目と続く行は、次のように再構築することができる。

"Montanv[S] V[An... M]An Iix	「モンタヌスは（？）年間生きて、8年間軍役を務めた。
Capito Opt De Liburna	カピトは、リブルナ型アウラタ号の副官（*optio*）で、
Aurata Cogn[At]Vs Heres F"	彼の親戚と相続人がこれを造った」

おそらく、碑文の欠落部分は、モンタヌスの階級と彼の船の名前に言及していた。しかし、これはどんな階級なのだろうか？ 筋肉状の装甲に身を包んだ士官は、軍船指揮官、あるいは百人隊長、海兵分隊の指揮官だったのかもしれない。

これほど詳細な肖像画を持つ墓石は極めて稀である。比較的小さいとしても、彼の碗型の髪をもつ故人の実際の外観を示しており、そしてまたユリウス・クラウディウス期における共通の詳細を持つ典型的な若者の外観である。このため、記念碑は紀元後1世紀の前半の時代のものとされている。しかし、私は、碑文で言及されているリブルナ型の名前からして、後期フラウィウス期を提案する。それはおそらくドミティアヌスによって創設された新しい「サーカス」の一派に関連している。マントヴァのドゥカーレ宮殿に保存されている、ラッパ手（*cornicen*）グネウス・コポニウス・フェリキオの墓石（*cippus*）は、髪型や彫刻で示される細部の品質において、実質的に同一である。文字は ―その記念碑上にその赤い原色で保存されているが― 私たちの海軍士官の墓石（*cippus*）に用いられたものと実質的に同じ形式である。

軍用装備

ラヴェンナの艦隊地区の墓石にある、艦隊兵（*classiarii*）の（数少ない）肖像は、通常、民間人の服を着た

軍人を描いている。海兵の他の墓石は、軍用短衣（*tunica militaris*）と外套（*paenula*）を着け、槍を持っている姿で自身を示している。モンタヌスの墓石（*cippus*）は、完全な戦闘衣で示されている艦隊兵（*classiarius*）の唯一知られている例である。槍は、分析の価値がある。

それは、ほぼ約4分の3高さのところで、2つの球状の形を示しており、フラウィウス時代のエリート兵士の投槍（*pila*）に見られる回転楕円体を装備した典型的な艦隊の槍として、私たちがそれを分類するために役立つかもしれない。回転楕円体は、カンケレリア浮彫の近衛隊用投槍、およびポンペイの近衛隊あるいはミセヌム艦隊の兵士を表したフレスコ画として実際に見ることができる。これは、私たちに、フラウィウス時代における浮彫の年代を示すための手助けとなる、もう一つの要素である。

モンタヌスは、下腹部と肩を保護する鱗（*squamae*）のような形をした小さな直垂を持つ筋肉様の胴鎧（*stadios*）および脚の付根と上方部を保護する翼状の肩当（*pteryges*）で身を固めている。彼が着用した鎧は、筋肉状の金属胴鎧である可能性がある。翼状の肩当（*pteryges*）と直垂は、明らかに筋肉様の胴鎧の本体から分離されている。肩の上には鎧本体から鱗状の吊り下がった小片（*kremasmata*）の二重列に分かれた線を見ることができる。翼状の肩当（*pteryges*）は、鎧の下の部分の厚い直垂の下にあり、原型の彫刻で約5ミリメートルの厚さによって、重ね合わせた反曲形により、分離されているのは明らかである。鎧を除いた衣服は、いくつかの違いはあるが、モデナで保存されていた不明将校の詰物をした衣服に似ているようだ。

上腕部保護の詰物は、その証拠である。彫刻家は、非常によく鎧の筋肉状の詳細を表示している。特に、胸筋と腹部のボタンはとても明確である。そしてまた約2ミリの線によって肩の上に二重の列の厚さを示している。翼状の肩当（*pteryges*）は、また別のモニュメントの他の多くの翼状の肩当（*pteryges*）よりも明らかに厚く、そのため原型は粗い絹あるいは亜麻との混合布のような、さまざまな材料で作られている可能性がある。

飾帯（*balteus*）は右肩から胸を横切って、体の左側に下がっている刀剣（*gradius*）を支えている。短剣（*pugio*）は、ポンペイ出土の有名な海兵のそれと形状がよく似ており（Ancient Warfare 111.2 参照）、エプロンに装着された帯（*cingulum*）の右側に付けられている。軍用マントは（*paludamentum*）は明らかに左の肩に掛かっている。軍靴（*caligae*）は彼の足に確りと結ばれている。私たちはコマッキオの船で発見されたかなりの数の軍靴（*caligae*）を思い起こすべきである。

すべてのこれらの詳細は、故人の階級が *optio* より高かったという説を支持するかもしれない。モンタヌスの軍事装備は、アクティウムの海戦の時期にある、パレストリーナの二段櫂船のよく知られた記念碑に彫刻された海兵のいくつかに非常によく似ている。この浮彫では、戦士たちの一人が槍と鎧で武装し、盾を持っている。浮彫上の彼の武具一式と彼の特権的な地位を考えると、この男は、おそらく船の指揮官を表すか、あるいは乗船する海兵百人隊の百人隊長を表している。おそらく、私たちのモンタヌスは、リブルナ型アウラタ号の指揮官であり、彼に対して彼の親族（*cognatus*）と相続人（*heres*）及び戦友（*commilito*）が石碑を奉納した。

更なる読書のために

F. Berti, *Fortuna Maris, la nave romana di Comacchio* (Bologna :1990).

R. D'Amato, *Arms and armour of the Imperial Roman Soldier, from Marius to Commodus, 112BC-192AD* (London 2009).

R. D'Amato, *Imperial Roman naval forces, 31 BC-AD 500* (Oxford 2009).

艦隊編成　【省略】

ローマ属州艦隊　：帝国海軍の実働部隊

馬渕　直樹訳

アクティウム海戦後の共和政末期の数年間、アウグストゥスがその地歩をゆっくりと固めている間、彼の主な目標の一つは帝国中の軍事力の広範なる改造にあった。政治的及び軍事的な出来事の目まぐるしい連続は、ローマ元首政のための新たなる境界線を設定した。すなわち大西洋、二つの大海(北海及び黒海)、そして三つの重要な河川(ライン、ドナウ、ユーフラテス)は、国境付近及びその向こう側にいる強力な隣人たちに対する防衛上、決定的な重要性を有していた。これらの自然の境界線沿いの水辺に住む者たちと物的資源の支配は、帝国が存続していく以降6世紀間において、その軍事政策の不可分の要素となっていくのである。

ミハイル・ザーリアーデ著

属州兵力に関するアウグストゥス改革の主要な構成要素は、海上及び河川での、新たな、あるいは完全な再編成を確立することにあった。これらはローマの防衛線の後背での陸上部隊輸送及び食糧輸送において、重要な役割を果たすべく企図されたものであり、敵側の岸に逆上陸を敢行することももちろん含まれている。しかしながら、厳密に各々の艦隊がいつ創設され、そしてそれは中央政府による決定であったのかに関しては、絶え間なく学究的な論争が交わされてきたのである。

海を行く属州艦隊

Classis Britannica

ブリテン島に駐屯した艦隊で、同島及び大陸側を含む沿岸の連絡及び輸送を主な任務とした。同艦隊は紀元70年(タキトゥス『同時代史』)に初めて Classis Britannica として言及されている。しかし、ブリテン島の艦隊として最初のものは、カエサルによるイギリス海峡越えの期間に求められることは確かであろう。紀元43年のクラウディウス帝による侵入が、ゲソリアークム Gesoriacum(フランスのブローニュ＝シュル＝メール)での大規模な兵力の召集を伴ったのは明らかであり、かつこの艦隊の正式な設置を記したものであることは疑い得ない。

この艦隊には二つの主要な本拠地があり、その一つはブローニュに、もう一つはドーヴァーにあった。この状況は2世紀、そして特に3世紀の間中ずっと変わらなかったようである。このことはイギリス海峡の両岸での、ブリタニア艦隊の二つの役割を示すものであった。同艦隊は、征服戦争、紀元1世紀にブリテン島で起こった反乱の鎮圧、アグリコラ Agricola によるスコットランド周航、そしてスコットランド部族に対するセウェルス帝の親征において重要な役割を果たしたのみならず、紀元70年のバターウィー族 Batavian の反乱の際には、その後背に陸上部隊を上陸させたりもした。この二つの海峡港、それらはリンプネ Lympnei にあったようで、それらに加えて明らかに海軍の行動に結び付けられるリッチボローRichborough のような地点もあった。

紀元2世紀のブリタニア艦隊の戦略上の役割は、紀元170年代のマルコマンニ戦争にその分艦隊が参戦したことよって強く示唆されている。その証拠の最たる断片の一つがマクタル Mactar(ヌミディア、現アルジェリア)で発見された碑文(CIL　VIII.619)であり、同碑文では、上級将校であるマルクス・ウァレリウス・マキシミアヌス M.Valelius Maximianus という者が、マルコマンニ戦争の際にパンノニアの陸上部隊に補給するため、ドナウ川を遡る輸送船団の護衛部隊を指揮したこと、

そしてそれを川の両岸からアフリカ人やムーア人の騎兵隊が護衛したばかりではなく、ミセーノ、ラヴェンナ、そしてブリタニア艦隊の軍船も加わったことが記されている。

ブリタニア艦隊は、紀元3世紀においては未だ健在であった。フィリップス・アラプス帝の治世下(244-249年)、同艦隊はフィリッピアーナ Philippiana の尊称を帯びることになった(CIL XII.686)。同皇帝の治世の頃、サクソン人とフランク人からなる略奪者の一団がブリテン島沿岸を襲撃するに及んで新たな防衛措置がとられた。この間に一連の相当数の要塞が、ブランカスターBrancaster の東西の海岸に築かれた。とりわけブラッドウェル Bradwell、レクルバーReculver、ポルチェスターPortchester、そしてペベンセイ Pevensey に。それらは共に、サクソン・ショアーSaxon Shore(Litus Saxonicum)として知られている一大防衛システムを形成した。しかしながら、イギリス海峡は大陸側から支配されており、その地のブライ Blaye、ナント Nantes、そしてブレスト Brest に既に存在していた陣地には要塞が追加された。この新たな防御構築の中でも、ブリタニア艦隊は、連絡、輸送そして部隊上陸としての重要な役割を果たしたに違いない。

紀元280年代のブリタニア艦隊司令官としてのカラスシウス Carausius の任命は、後に紀元286年末、彼自身が帝位を宣言するという反乱に帰結した。彼はブリタニアと北ガリアの沿岸地域を帝国から分離した。とはいえ、カラウシウスは、イギリス海峡両岸におけるサクソン人及びフランク人海賊の勢いを食い止めることについては重大な役割を果たした。ブリタニア艦隊は、もはや *Notitia Dignitatum* に記録されなくなり、大陸のサンブリカ艦隊 classis Sambrica(*Notitia Dignitatum* Occ. 38.8)が、紀元4世紀中頃からそれにとって代わるようになった。

Classis Perinthia

紀元1世紀、この名称を持つ艦隊が存在したことを研究が証明したが、それは土着のトラキアの海軍に基礎を置いていたようである。その司令部はトラキアの都市ペリントス Perinthus にあった。Classis Perinthia は黒海と地中海の間にあるヘレスポントを支配するため、トラキア併合後程なくして設置された。同艦隊はマルマラ海沿岸とトラキアの沖合で、おそらく紀元1世紀末まで運用され、classis Pontica に併合されたとされる。我々はその活動について知るところはほとんど無い。同艦隊について言及している稀少な文書の一つが、紀元88年ないし89年と比定されている Ti . Claudius Zena(IGR I.781)という名の男についての碑文である。

Classis Pontica

この艦隊はポントス王ポレモ Polemo の王室艦隊の一部から、ネロ帝によって創設されたものである。碑文及び文書史料は紀元1世紀から3世紀に及んだその活動を記している。この黒海の艦隊が創設された主な理由は、黒海南部及び東部、ビテュニア Bythynia の沿岸、そしてコーカサスの海岸を支配することにあった。ヨセフス(『ユダヤ戦記』2.16.4)は、その艦隊が兵員3,000名を有する40隻の艦艇から構成されていたと述べている。紀元2世紀の後半、その司令部はキュジコス Cyzicus(マルマラ海南岸)に移転したが、おそらくはヘレスポントを通過する交通量の増加と、黒海地方を荒らしまわるゴート人の部族コストヴォキ Costoboci による破壊的な襲撃に対処するためであったろう。その艦隊の錨地 statio がクリミアのカラクス Charax(現 Ai Todor)にあったのは明らかである。仮にそれが事実であるなら、一定の期間、この艦隊が黒海北岸地域で運用されたことを意味するだろう。

Classis Pontica は、解放奴隷で、ポントス王ポレモの王室艦隊のかつての長官であったアニケトゥス Anicetus の反乱に巻き込まれた(タキトゥス『同時代史』3.57-58)。彼はウィテリウス帝を支持する旗を掲げ、相当数の兵力を集め、トゥラペズス Trapezus(トラペゾン、トルコ)を略奪し、

Pontic 艦隊に火を放った。我々は、この時ウェスパシアヌスの将軍ムキアヌス Mucianus が、Pontic 艦隊所属の残存リブルニア船の多くを用いたことが分かっている。アニケトゥスは同艦隊を、海賊行為による略奪故に camarae と呼ばれた数多くの小型の快速船で増したのであった。

他にも地中海で運用された艦隊は存在したが、その活動に関する記述は僅かである。

Classis Syriaca

この艦隊は碑文のみにしか記述がなく、おそらくウェスパシアヌス帝によって創設されたものであろう。その司令部はアンティオキア(シリア)の外港であったセレウキア・ピエリア Seleucia Pieria にあった。碑文は数名の上級将校について記している。一人は長官 praefectus で、一人は指揮官 praepositus で、一人は三段櫂船艦長 trierarchs である。シリア艦隊は、そこを基地とし、当時 classis Seleucena と呼ばれた別の艦隊へと変化する間に、幾つかの再編を経たことは明らかである。

エジプトの Classis Augusta Alexandrina(*CJust* XI.2.4)は、アリクサンドリアを基地としたプトレマイオス朝艦隊の再編版であるらしい。それは都市ローマへの穀物供給とその陸上部隊を統制することに深く関わっており、港では関税徴収を行い、対パルティア戦に従軍している陸上部隊への穀物輸送を差配していた。その長官は指揮下に Potamophylacia(「河川警備隊」)という、ナイル川での警備や見張りを行う数種類の小艦隊を有していた。(当時、近衛軍団の司令官ではなく先任の帝国行政官であった)道長官 praefectus praetorio の職にあったアンティミウス Anthemius に発せられた紀元409年の帝国法は、classis Alexandrina について、ロードス島周辺で活動した classis Carpathica と共に記録している(*C. Th.* XIII.5.32)。適切な航海と輸送を再構築すべく与えられた配備内容は別として、それは当時の東地中海での艦隊の悲惨な状況を示すものである。

アフリカの諸属州は、たとえ史料が非常に限られている状況においても、我々が知るところでは三つの艦隊を配置していた。紀元186年、コンモドゥス帝は、エジプトから都市ローマへの穀物供給が遅れた場合に備えて、Classis Alexandrina の代わりに Classis Africana(*SHA.* Life of Commodus 17.7)を組織した。それは紀元180年に初めて記録に現れ、キレナイカのプトレマイス Ptolemais を基地とした Classis nova Lybica のことであるらしく、同艦隊はアフリカ(の属州)から都市ローマへの穀物供給を確保するべく紀元2世紀後半に設置されたのである。幾人かの歴史家たちによって、アフリカの第三の艦隊である classis Mauretanica がカエサレア・マウレタニアエ Caesarea Mauretaniae(今日のアルジェリアのシェルシェル Cherchell)を基地とし、アフリカの西地中海沿岸を支配し、それは水上輸送に対するムーア人の海賊的襲撃を防ぐためのものであったと信じられている。しかしながら、実際にはこの艦隊は、その地域での軍事行動を支援すべく、他の地中海の艦隊群から選抜された一時的な支隊であったということの方がありそうな話である。

河川艦隊

ローマの防衛システムの根幹として、ライン川とドナウ川の両河川は、ローマ帝国勢力の投影と維持の中で極めて重大なものであった。この軸は強固な陸上部隊と艦隊群によって維持され防衛された。

Classis Germanica

この艦隊は、ライン川沿いでゲルマン諸部族に対する軍事作戦が行われるに際して、アウグストゥス帝の治世末期に作り出された。同艦隊はその地域及び北海沿岸に陸上部隊と補給物資を輸送す

る任務にあたった。最初の分艦隊はカストラ・ウェターラ Castra Vetara(クサンテン Xanten)とオランダのラインデルタに設置された。それらは早くも紀元前12年、大ドルススの下での作戦に従事し、後には紀元16年、1,000隻前後の特別に建造された異なる型式の艦艇群を配備し、ゲルマニクスの指揮下に入った(タキトゥス『年代記』2.6)。classis に関する明確かつ公式の記録は紀元69年に現れるのみだが(タキトゥス『同時代史』1.58)、紀元30年の後、その司令部をコロニア・アグリッピネンシス Colonia Agrippinensis(ドイツのケルン)の3キロ南にあるアルテブルグ Alteburg に移転した。Classis Germanica は紀元4世紀まで、ゲルマニアにおけるローマ軍の重要な構成要素であり続けた(Eumenides, Panegyric of Constantine 13)。

Classis Pannonia

カストラ・レギーナ Castra Regina(ドイツのレーゲンスブルク)からシンギドゥヌム Singidunum(セルビアのベオグラード)までのドナウ上流域は、Classis Pannonica が管轄する地域であった。その正確な設立日は知られていないが、紀元前35年頃のパンノニアでのアウグストゥスの軍事行動の際、陸上部隊と補給に関する何らかの水上輸送が必要となったのだと考察するよい証拠がある。しかしながら、その存在が確実なのは紀元45年まで待たなければならない(タキトゥス『年代記』12.30)。その主要な基地は、サヴァ川とドナウ川の合流点であるタウルヌム Taurunum(セルビアのゼムン)におそらくあったが、その存在の痕跡はラウリアクム Lauriacum(オーストリアのロルヒ)、カルヌントゥム Carnuntum(オーストリアのペトゥロネル)、ムルサ Mursa(ハンガリーの Eszeg)、そしてシスキア Siscia(ハンガリーの Sziszeg)、シルミウム Sirmium(セルビアの Mitrovica)に確認されている。

Classis Flavia Moesica

帝国のドナウ国境沿いでの最初の艦隊は、ローマの支配が最初に同河川沿いに及んだ時点まで遡る。ドナウ川が黒海に近接しているのと同様、ダキア人とサルマタイ人が住んでおり、沿岸の警備、必要ある場への干渉のために、ほどなくして艦隊の設置を必要としたのである。黒海沿岸の行政のための建築物は ora maritimae(「岸と水」)と呼ばれ、長官の下で、トミス Tomis へのオウィデウスの逃亡の頃には既に存在し、紀元12年及び15年には、ゲタイ人がアエギュッスス Aegyssus(ルーマニアの Tulcea)及びトゥロエミス Troesmis(ルーマニアの Turcoaia)における水上勢力によって駆逐されている。紀元86年の、ドミティアヌス帝による上部及び下部モエシアという二つの別の属州の設立は、戦闘艦隊の系統的な編成を含み、Classis Flavia Moesica は、デケバルス王が支配する強力なダキア人国家に直接的に対峙した。それはシンギドゥヌム Singidunum(セルビアのベオグラード)からドナウデルタに至るドナウ川の長い水域はもちろんのこと、黒海北岸及び西岸全てを支配した。ノビオドゥヌム Noviodunum(ルーマニアの Isaccea)を基地とする艦隊の河川分隊とケルソネッスス Chersonesus(クリミアのセヴァストポーリ)にその司令部を置いた海軍の分隊があった。モエシア艦隊の基地群はウィミナキウム Viminacium(ルーマニアの Kostlac)、ドゥロベタ Drobeta、ラティアリア Ratiaria(ルーマニアの Arcar)、セクサギンタ・プリスタ Sexaginta Prista(ルーマニアの Ruse)、ト゜ゥロストルム Durostorum(ルーマニアの Silistra)、そしてハルミリス Halmyris(ルーマニアの Murighiol)が記されており、一方、黒海北部ではテュラス Tyras(ロシアのベルゴロド)、オルビア Olbia(ロシアのオチャーコフ)、そしてカラクス Charax(クリミアの Cape Ai Todor)が記されている。

紀元3世紀のドナウ下流を越えてのゲルマン人の大規模な侵入は、その事件に深く巻き込まれたモ

エシア艦隊の水上部隊に深刻な影響をもたらした。一般的な見解では、紀元3世紀の後半には、同艦隊はその形態としては消滅したのである。

後期のローマ艦隊

四分治統治の期間、それは紀元3世紀後半、深刻な動揺をきたしていたローマ帝国を回復させるものであり、海軍力とその人的資源は部分的に回復された。しかしながら、ウェゲティウス Vegetius によるとほんの暫く後のコンスタンティヌス帝の治世下、イタリアの近衛艦隊が、かの近衛軍団がそうであったように解散させられた。その緊張はドナウ及びライン川の艦隊にも及んだが、他の幾つかの海軍分艦隊は確固として維持されもした。

Notitia Pignitatum は西帝国の、主に川で用いられた水上部隊について言及しているが、それにもかかわらず、それらは明らかに大規模な作戦行動はとれなかったものと信じられている。紀元5世紀半ばまでには、西帝国は実質的に海上兵力を喪失していたのである。

対照的に、存続したローマ帝国の東部分は、よく組織された海軍を維持し得た。紀元4世紀の歴史叙述文学に記録された船の型式の大半が維持され、他のものは新たな進化を遂げた。紀元4世紀から5世紀初頭の海軍の活動は、テオドシウス帝及びウァレンテイアヌス帝の帝国法において反映された重要な事実である。その産物は紀元535年の新たな行政機構である Quaestura Iustiniani Exercitus(「ユスティニアヌス帝の審問官の船」)であり、それはエーゲ海の幾つかの島々とドナウ下流の諸属州を管轄範囲とするもので、地中海東部及びドナウ地方の艦隊に新たな衝撃を与えた。

艦艇

基本的にローマの軍船の全ては、初期ギリシアの設計を反映したものであったが、それらは幾つかの重要な改良点を示している。装飾的な akrostorion を形成するその最も高い点にある凹面の船首は embolion と呼ばれたけづめが装着され、時には proembolion によって二重になっていた。ローマの軍船は二つの基本的な種類に帰結する。漕ぎ手のための防御用の覆いのない上部甲板を有するもの(apertae naves「無蓋船」)、あるいは舷檣や塔を備えた kataphractae である。ギリシアあるいはヘレニズム諸国の対照物のように、その推進力は漕ぎ手式としての人力、そして風であり、それらはそれぞれの中の漕ぎ手の数によって区分されいていた。一段櫂船 monoeres、二段櫂船 biremes、三段櫂船 trieremes、四段櫂船 quadriremes、五段櫂船 quinquiremes、六段櫂船 hexeres というように。後者については、唯一の事例が全帝政期を通じて知られている。

紀元2世紀には、大型の軍船は、より速く、より効率的な三段櫂船 trieremes と、帝国及び属州の戦闘艦隊の両者においてリブルニア船 liburunae として知られた船の型式が好まれる中で廃棄されていった(下を参照)。それは真実ではあるが、近衛艦隊は未だに幾つかの大型船を保持していた。

帝国艦隊の中で共通のものとなった、軍船の「新しい」型に関しては、多くのことが最近になって書かれてきている。それは liburna 若しくは liburunica であり、複数の古代史家によって言及されている。それはローマ海軍の中で、とりわけ属州艦隊の中で最も「知られた」ものとなった。アッピアノス Appian によると、この艦艇の名称は海賊行為を働いていたダルマティア沿岸に住んでいた民族、すなわちリブルニア人 Liburnians(Liburni)に由来している。ウェゲティウスはこの単語の驚くべき広がりは、アクティウムでのアウグストゥスの勝利によるものであると述べており、(描写されているように)librnae というこの独特の型によって勝敗が決せられたのである。その単語があらゆる型の軍船と同義語になるまで、益々広く使用されたことは明らかである。

トラヤヌスの円柱は、紀元1世紀から2世紀初頭にかけてのローマ軍に関する最も有名な、そして

論じられてきた典拠の一つである。全ての悲観的な見解にもかかわらず、それは紀元101～106年にかけてのダキア戦争で用いられた軍船について、非常に多くの詳細な描写を提供するものであり、二段櫂船と三段櫂船の総計10隻の軍船が示されている。これらの内の4隻(場面33、34、35、46)は(紀元102年の)下部モエシアでのデケバルス Decebalus 同盟軍に対するトラヤヌス帝の親征を示しているものと同定し得るものである。幾つかの些末な詳細部分を除いて4隻の二段櫂船は同様に表現されている。

元首政期、リブルニア船 libruna は各舷側に26～28人の漕ぎ手たちを乗せた軽量の戦闘艦であった。その人員は56名の漕ぎ手、6名の水兵、そして数名の海軍兵士(milites)からなっていた。H.D.L.Viereck により提案された復元によると、軽量の libruna は船首と船尾の間に二つの艦橋を備え、その長さは約21メートル、幅3メートルで0.8メートルの喫水を有していた。プルタルコス(『アントニウスの生涯』67.2)では、船は propugnacum(「砦」)を有し、それは艦橋をとりわけ漕ぎ手たちの上級者たちを守る壁板からなっていたと述べられている。この防御システムは librunae をいわゆる naves constratae もしくは katafrakta の範疇に含ませている。

輸送及び補給の船舶も、ローマ海軍で重要な役割を果たした。商品及び軍需物資のために用いられた河川と海の船舶の型式は、トラヤヌス円柱のモザイク(例えば Althiburus)で見る限り、全く同じように見え、Hunt のパピルス・コレクションの記録でもそうである。最も有名な型式の一つは ratis と呼ばれた。それは驚くほど単純な平底の荷船のように Althiburus のモザイク画に表れている。紀元1世紀の rates の小艦隊は、ドナウ川の主要都市の中心にラティアリア Ratiaria という名称を与えた。Thalamegas もしくは cubiculata naves、hippago、そして naves frumentaria といった輸送船がこれらの文書の中に記録され、河川でも海でも用いられたものであった。30本のオール(各舷15本)を持った navis actuaria のような小型のオール漕ぎの船舶もあった。それは主として近海や河川での軍事作戦での輸送に用いられたが、それは浅い喫水と平らな竜骨が理想的であったからである。

紀元4～6世紀、船の型式に関する全体的な絵画は実質的に変化した。navis lusoria(playing ship)と呼ばれた新しい型式の軍船が現れたのである。それはローマ海軍の軽量船で、ライン、ドナウ川の辺境及び海上で属州小艦隊による哨戒及び攻撃に用いられた。それは元首政期のリブルニア船の役割を引き継いだ。紀元4～5世紀の navis lusoria は、本来は乗客用の船室を持った輸送船、それは後に navis cubiculata に同化していくのであるが、であったことは興味深い。マインツでの1、4、7、9番の船の発見は、navis lusoria と同定された。その調査は、それらが長さ20メートルで、長さと幅の比率が6.7対1であること、それは軍船にとって理想的なものなのだが、それを明らかにした。復元物はそのような船が「ラテン帆」そしてオールによっても推進されたことを示している。マインツの船の残骸1は navis lusoria が各舷側に13本のオールを有していたことを示している。それは川の軍船の標準であり、大き過ぎず、かつ非常に速かったのである。

紀元412年の帝国法はドナウ下流域の属州であるスキティア Scythia 及び下モエシアが110隻の新造船と、更に15隻の修理によって125隻の navis lusoria を配備した最初の属州であったことを示している。モエシアは追加で100隻の lusoriae を配置した。同法は、毎年 agrarienses(「監視船」)と呼ばれた船10隻と、4隻の iudiciariae(「連絡船」)の建造をモエシアに命じている。更に5隻の iudiciariae と12隻の agrarienses がスキティアで建造された。その長さ15メートルのの艦艇と、マインツの3番は navis iudiciaria であるようである。

他の新型船は、ローマ後期の文書史料に豊富に記録されていて、lembus という、二つの帆、そして二倍のオールの速さの中型船が、監視や輸送船団の護衛に用いられたことを含んでいる。もう一

つの型はmusculusという小型の軽量快速船で、ドナウ及びローヌ川で時に用いられた。

Naves amnicae(その特徴は未だ論争中だが)、ドゥローモン dromones(紀元6世紀のドナウ川そして初期のビザンツ帝国に特有のもの)、そして diaprymna がローマ帝国末期に使われた主要な戦闘艦艇である。補給及び陸上部隊輸送として、我々には naves fluminalis もしくは naves onerariae というギリシアでの変形版である olkades に関する記録がある。これらは商用及び輸送の船舶として用いられた。この時期に用いられた船の特別な型は platypegia という浅い竜骨の幅の広い船舶で、ナイルやドナウデルタでの航行に向いていた。

このような短い論説はローマ帝国の属州艦隊の概論を提供するだけのものである。更なる研究の価値があるが、私は不確実なことや論争に満ちていることにあなた方が気づくものと確信している。

ミハイル・ザーリアーデ Mihail Zahariade はルーマニアのブカレスト考古学協会「Vasile Parvan」の上席研究員である。彼の共同著作であるドナウ下流及び黒海の艦隊についての書籍は、未だにこれらの属州艦隊に関する権威ある著作となっている。

アクティウムの海戦　紀元前31年　運命の風　【省略】